



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国蘇南地域における内水面漁業・化繊織物業の企業的展開と農村金融：江村の追跡調査(9)
Author(s)	朴，紅；坂下，明彦
Citation	北海道大学農經論叢，74，119-132
Issue Date	2020-12-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81640
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_p119-132.pdf



中国蘇南地域における内水面漁業・化繊織物業の 企業的展開と農村金融 －江村の追跡調査(9)－

朴 紅・坂 下 明 彦

Corporate Development and Rural Finance of Inland Fishery and the Synthetic Textile Industry in South Jiangsu Province: Jiang Village Follow-Up Study (9)

Hong PARK, Akihiko SAKASHITA

Summary

The target of this study is Kaixiangong village, which is located in a coastal area. Kaixiangong village was once a model for the development of village companies in the Sunan area and its industrialization has been progressing mainly in the synthetic textile industry after the conversion into private companies. On the other hand, regarding the primary industry, the intensive agriculture that combined rice farming and sericulture has almost disappeared as it has been replaced by a cooperative inland fishery conducted by some farmers who engage in Chinese mitten crab cultivation. Although the rural finance in this kind of cooperative development is very important, few specific studies have been conducted on this matter. Our study clarified that the inland fishermen basically use their own private funds, a high proportion of which is used to pay for feed. The fishermen strongly depend on credit sales at feed stores as well as on interest-free loans from their relatives and friends in an emergency. In the synthetic textile industry, bank loans with real estate mortgages are common, but the risk is relatively high when relying on private lending with high interest rates; thus, there are cases of bankruptcy. Although a financial system corresponding to corporate development has been established in this way, it still lags behind compared to urban corporate finance, and it can be difficult to raise funds.

はじめに

中国における農村の産業構造は大きな地域性を有する。われわれが対象としている開弦弓村（ニックネームは江村）は沿海部に位置し、かつては郷鎮企業展開の蘇南モデルの地といわれ、私営企業への転化の後も繊維産業を中心に工業化が進展している。一方、第一次産業では、かつての稲作と養蚕が結合した集約的な農業はほぼ消滅し、上海ガニを主とする一部の農家による内水面漁業にとって代わられている。

したがって、この地域の産業は、さまざまな自営雑業的な「小商い」を除けば、繊維産業と養殖

漁業の企業的経営に多くを依存しているといえる。企業的経営においては、家族経営以上に運転資金や投資資金に対する需要が大きいが、これに関する研究は限定的である。

中国の農村金融の状況については、1990年代には詳細な統計が公表されていたが、以降は限定的となっている。そのため、農業金融に関する研究は一部の資料を利用した王〔2017a, 2017b〕などの概説にとどまっている（註1）。中国での農村企業金融に対する調査報告はいくつかあるが、「多くの農村企業は正規金融を利用しているが、十分な資金調達ができないため、非正規金融に依存するケースも少なくない」と言われている（註

2). ただし、これらはアンケート調査であり、具体的な融資の内容を企業展開との関係で明らかにしたものではない。

そこで、ここでは開弦弓村を対象に、上海ガニを中心とした内水面漁業と化繊織物工場の展開事例を整理したうえで、それらにおける融資の状況について述べることにする。

1. 開弦弓村における企業の経営の展開と農村金融の概観

(1) 開弦弓村の産業的特徴と内水面漁業・化繊織物業

開弦弓村は、江蘇省蘇州市呉江区の太湖湖畔に位置する七都鎮の1村であり、長江下流のクリーク地帯に位置する(表1)。農地は圩と呼ばれる「島」に水田、桑畑として存在し、人口が多く、水稻作、養蚕の他、「湖羊」の飼養、水運の労務など多就業的な労働によって家計は維持されてきた。

人民公社期から製糸工場が創業されるが、その経営権が上部組織に横領されると、村営の化繊の織物工場を創業して農村工業を再興し、蘇南モデルといわれた典型的な郷村企業による工業化を進展させた。各農家は工場への雇用を保証され、村ぐるみの兼業化が進展を見せる。1990年代には村営企業は経営危機を迎えるが、工場の幹部が請負制を経て私営企業主へと成長し、ニット衣類のパーツ生産という家内工業の進展と合わせ、農村

の就業は維持されている(註3)。

他方、水田は上海ガニの養殖池へと転換され、養蚕も衰退して桑畑も激減した。図1に示すように養殖地割合は2016年には84.0%に達している。土地利用は一部の上海ガニ養殖農家に担われることになり、水田の持ち分所有者は地主へと転化する(註4)。世代交代の中で、親世代は自給的な農業に従事して事実上隠居状態にあり、子世代は織物工場を中心とした工場労働者の共稼ぎを行っている。ただし、自営業的なさまざまな「小商い」を行っているものも多い。他出者は少なく、少子高齢化が進んでいるとはいえ、3世代家族が何とか維持されている。

(2) 農村金融の歴史と概観

2015年に出版された『開弦弓村誌』(pp.224-225)などにより、開弦弓村での農村金融の流れを整理すると以下の通りである。

民国期の金融組織は「合会」という8~20人のメンバーによるグループが中心であった。身分は地主、富農などさまざまで貧農も加わっていたが、あまりにも貧しいものは排除されていた。宗族は関係せず村の組織であり、利息はない。会費は100元であり、半年に1回会合する。1回りが10年であり、先に借りる方が有利であるためくじ引きにより順番を決め、地主は最後に借入するという慣習があった。

人民公社期には個人の生活資金の需要はほとんどなかった。冠婚葬祭の際には生産隊から無利子

表1 開弦弓村の概要(2013年)

戸数と人口 (戸, 人)	小 組 数	25	土地面積 (ha)	総 面 積	450
	農家戸数	785		耕地面積	239
	専 業	38		水 田	4
	1 兼	35		園 地	15
	2 兼	130		養殖池	207
	非農家	582		その他	12
	人 口	2,853	総生産額 (万元)	合 計	27,703
	農村労働力	1,520		農林業	101
	家庭経営	829		畜産	500
	外部就業	119		漁業	957
	(恒常勤務)	108		工業	25,012
			商業		—
			農家1人当たり純収入		19,983

注) 開弦弓村資料(「農村基本情況統計表」「農村経済収益分配統計表」)により作成。純収入は2012年の数字。

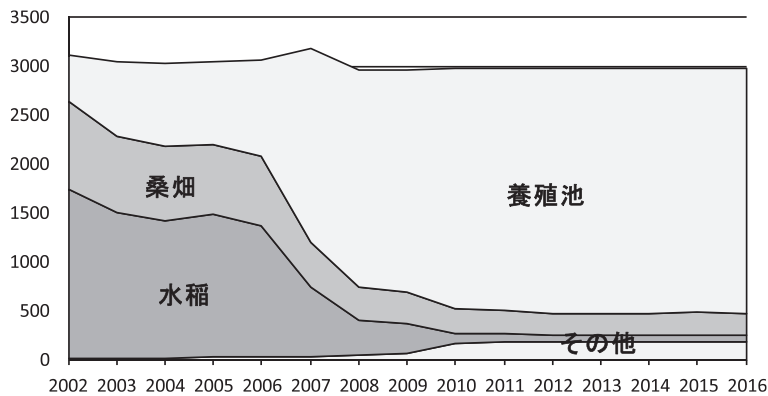


図1 土地利用の変化

注) 村民委員会資料により作成。

で借金が可能であり、返済は年末に労働点数で相殺されていた。その範囲は、親戚や近所の友人であり、主に「自家人」と呼ばれる範囲、100人規模であった。小額の貸借の場合には、村人間の貸し借りで賄われた。生産隊からの物資配分は、夏が穀物、油、燃料、豆などの現物支給であり、秋にも現金支給はほとんどなかった。食糧が不足した際には生産隊から借用した。家には穀物を備蓄するスペースがあり、脱穀機・製粉機は生産大隊にあった。生産隊は備蓄糧が義務化されており、不足時には備蓄糧庫から買い戻せるが、秋には返済する必要があった。人民公社解体後、生産隊は村民小組となり金融機能を失った。そのため、生活資金は農家間の融通となり、家内工業についても担保がなければ銀行からの融資を受けられないため、個人間融資となった。

農村信用合作社は1953年に農民出資1戸0.8元として郷を単位として組織された。人民公社期には公社内の信用部となり、その解体後「独立」したが、その改革が一貫して大きな課題であった。1996年には村に信用社の窓口ができたが(後掲図2)、2000年に引き上げられた。合併以前の鎮政府所在地であった廟港にある信用社は2000年以降に農村合作商業銀行に再編された。廟港にはほかに農業銀行営業所と郵政銀行(村にあるのは中継機)があるが、基本的に農家への貸し付けを行っていない。

1980年代後半からは住宅建設が進み、それまでの平屋造りから2階建に、そして2000年代には

「別荘型」と呼ばれる豪華な家屋が建築されるようになってきている(坂下ほか[2010], 村誌[2015] p.347)。その建築の際、特に1990年代には短期的に親戚や知人に借金をするケースが多かったが、この貸借では無利子融資が一般的であった。

1990年代以降の内水面漁業と化繊織物業における特徴については、本論で事例的に明らかにする。

2. 内水面養殖業の展開と金融

内水面漁業は、1997年からブームとなった。村には圩を囲むように2つの水面(外蕩)があり、そこから内水面漁業が始まったが、ブームの下で水田転換による養殖が主流となった。圩(島)の中に池があるという景観が広がるのである。以下では、1980年代、90年代、2000年代というスタートの異なる3つのケースを対象として、内水面漁業がどのように展開していったかを追跡してみよう。

(1) ケース1 1980年代からの展開－水面から圩へ

趙全榮(1949年生、13組)は、本人と妻、長男(1972年生)と妻[1994年に結婚]、その養女(1998年生)とその長女(2000年)の6人家族である(註5)。養殖漁業の2015年までの展開は以下の通りである(表2)。

1) 水面での魚養殖の展開(1983-2000年)

第一が潘香圩での共同経営(1983-85年、3年間)である。潘香圩の北側の浅瀬(4～7組、

表2 趙全栄の養殖業の展開

圩名	団地 No.	期間		面積 (ムー)	借地料 (元/ムー)	魚種	備考
		開始	終了				
潘香圩	①	1983	1985	50	260	草魚	実質は90ムー, 5人の共同
	②	1986	1997	10	60	草魚・鰱魚・鯪魚	
	③	1995	1997	13	450	青エビ	水面
東庄蕩	④	1998	2000	1,200m ²	全600	草魚・鯪魚	水面
亀字圩	⑤	2001	2005	23	450	上海カニ, エビ, ザリガニ, 鰱	
		2006	2008		800		
		2009	2012		900		
		2013	2015		900		

注) 2016年6月6日調査による。

14・15組から借地, 以下同) 50ムーと亀字圩の水門の貯水池2ヶ所(1組, 12組, とともに1.5ムー) 3ムーを5人で共同経営を開始する。1983年は家族請負制が始まった年で, 副業が奨励されていた。土地の利用については, 村民委員会ではなく, 関係する8つの村民小組の組長に交渉して許可をもらった。投資のために信用合作社が1万元の貸付を認定してくれ(政策支援), その資金は一人2,000元づつ返済した。ここは主に圩の周りの浅瀬であり, ネットを張り草魚を養殖した。借地料はムー当り260元であった。3年間であったが, 年間剰余が1万円を上回り「万元戸」となっている。

第二が潘香圩の共同経営の分割・経営(1986-97年, 12年間)である。潘香圩の共同経営のうち, 南側の条件の良くない10ムーを趙が個人で10年間借地した。借地料はムー当り60元であった。魚種は草魚, 鰱魚と蓮魚であり, 餌の草を与えるのが大変であった。魚価が下落したため, 10年間の年間剰余は7,000~8,000元の水準であった。

第3が潘香圩での追加借地(1995-97年, 3年)である。潘香圩の借地の南側の水路, 13ムーを追加的に借地している。前者とあわせ23ムーとなる。前借地者は2つの池で稚蟹の養殖をしていたが, それを1つにして掘削も行い, 経費は合計で2,000元であった。青エビを養殖したが, ネットがなく管理が大変であった。青エビの認知度が低く, 現在は1斤50元のところ, 当時は5元にしかならなかった。それでも収益は5万元ぐらいあったという。

第4が東庄蕩での箱養殖(1998-2000年, 3年間)である。上の2つの水面は条件が悪かったので, 東庄蕩の箱養殖に転換した。権利(「借地料」)は1箱100元で, 6箱(1,200m²)であった。投資は1箱が1,000元であるが, その他費用を加え1,500元であり, 合計で9,000元となった。魚種は草魚と蓮魚であり, ここでも草を刈って与えるのが大変であった。販売先は浙江省南潯に4人の固定客がいた。剰余は年間1万円になった。しかし, 水面の汚染のために養殖を禁止されてしまった。

2) 上海蟹への転換(2001-2015年)

蟹の価格が高く, 友人にも経営が順調なものがいたため, 2001年から蟹養殖に転換した(ほかにエビ, ザリガニ, 鮮魚)。亀字圩の13組の水田67ムーのうち, 規模と資金面を勘案して23ムーを借地した。水田からの転換のため, 初期投資は19,000元であった。また, 借地料はムー当り450元であり, 全体で10,000元であった。およそ3万元が必要であった。

蟹の生産は, 稚蟹(白蟹)を5月に放流して12月に収穫する扣蟹生産(中間段階)とこの扣蟹を購入して養殖し翌年9月から販売する成蟹生産に区分される。この経営は成蟹生産であり, 扣蟹のムー当たり投入量は当初の600匹から2015年の1,200匹へと密植化しており, 空気を入れて養殖するようになっている。当初の収穫量はムー当たり300匹で, 生存率は50%程度であった。近年では収穫量は400~640匹となったが生存率は33~50%へと下がっている。

蟹の収穫はムー当り150斤(75kg)であり、斤当り30元であるから、ムー当り4,500元となり、23ムーで10万円となる。それに対し、コストは扣蟹代が1.4万円(ムー当り600元)、飼料代が3.2万円(ムー当り1,400元)、借地料が2万円(単価は900元に上昇)、薬品などその他経費が1万円であり、総経費はおおよそ7.6万円となる。

エビは4月中旬から6月下旬までの販売であり、粗収入は6万円、経費が2.3万円である。ザリガニは5月の販売であり、粗収入は2万円、経費が1万円である。その他に魚が2種(魚蕨と知行)あり、粗収入は3.3万円、経費が1.6万円である。全体でみると、粗収入は21.3万円で、経費が12.5万円なので、剰余は8.8万円となる。

融資については、1983年の請負制の開始と関連して、外蕩での内水面漁業の開始に際して、信用合作社からの政策的融資が見られる。以降については、かなりの投資と運転資金を必要としているが、回答は得られなかった。知人からの借入と飼料販売店からの現物融資であると考えられる。

(2) ケース2 1990年代からの展開－上海ガニとエビの複合養殖

1) 3段階の経営展開

徐雪坤(1953年生、1組)の家族は、本人と妻(1957年生)、母(1925年生)の三人である(註6)。農地は3.2ムーで、亀字圩に1.2ムー、長圩に2ムーある。1組の土地は亀字圩が36ムーで組内の2戸に賃貸しており、長圩は30ムーで湖州の人に貸している。他に10ムーを植林している。

養殖業の展開を見ると以下のとおりである。

第一は、東庄蕩の一部100ムーによる水面養殖であり、1990年から97年の8年間行っている。この東庄蕩は村が養殖場に貸付したものを又借りしたものであり、地代は2組の人と共同で年間2,500元であった。鮮魚とエビを養殖したが、現在よりも粗放なやり方であった。

第二は、1998年からは開弦弓村の北側に隣接した連強村所属の天字圩の養殖池を3戸(本人と東庄蕩の共同経営者と豊明村の1戸)で借地している。ここは、温州のひとが蟹の稚蟹生産を行っていた跡地であり、成蟹養殖のために水深を深くするために掘り下げを行った。そのため、初期投資は一人当たり2万円となった。初年度は共同経営

を行ったが、2年目からは個別に分割し18ムーとなった。借地料は最初の4年間でムー当たり400元で、後の4年間は450元となった。

第三は、この18ムーが2005年に省道の建設で買収にかかったため、2006年に近くの連強村の長圩に移転した。連強村8組の管轄の水田を借地して養殖池を造成した。これは2組の別の人との共同事業で行った。2人で58ムーであり、投資額は二人で23万円であった。本人の投資額は11.5万円であったが、この年は娘の結婚もあり、不足分は親戚から借金した(無利子)。池は4つ造成し、その年に1戸2つづつに配分した。本人の面積は29ムーである。借地料は2006年から12年の6年間は950元である。当初は8年契約であったが、長圩の多くが6年契約だったため6年に短縮された。再契約では2013年から8年であり、借地料は1,050元であるが、4年終了後の2017年に料金を改訂するという契約である。

2) 養殖の形態と収支

養殖の品目は上海ガニが基幹であるが、「裏作」で青エビと魚蕨も養殖している。上海ガニの生産形態は天字圩での生産と同じ成蟹生産であり、2月に扣蟹を購入して秋に販売する。

経費は、借地料はムー当たり1,050元であり、総額で3万円(1,050×29ムー)であり、20%程度を占める(表3)。飼料は蟹用であるが、魚の冷凍が3万円、穀物(トウモロコシ、大豆粕、配合飼料)が3万円であり、合わせて6万円と40%

表3 養殖業の収支(2015年 概数) 単位: 元, %

		合計	ムー当り	割合
収 入	蟹	175,000	6,034	61.4
	青エビ	90,000	3,103	31.6
	魚	20,000	690	7.0
	合計	285,000	9,828	100.0
支 出	借地料	30,000	1,034	18.3
	飼料	60,000	2,069	36.6
	薬品	10,000	345	6.1
	扣蟹	22,000	759	13.4
	稚エビ	40,000	1,379	24.4
	稚魚	2,000	69	1.2
合計		164,000	5,655	100.0
収支差額		121,000	4,172	

注) 2016年6月の聞き取り調査による。

を占める。最近増加しているのが薬品代1万元であり、池の消毒薬（3種類）が2,400元に対し、アミノ酸などの添加剤が7,600元と増えている。3品目の稚魚では、青エビ（2,000斤）が3.4万元と最も高く、扣蟹（800斤）が2.2万元、稚魚が2千元となっている。

収入と余剰についてみると、青エビは2月に稚魚を放流して、4月中旬から6月末までの1か月間、毎日販売している。集荷業者は10名ほどいるが1名に固定して販売している。夜の7～8時にトラックやワゴン車で集荷に来て、翌日朝に蘇州や嘉興で販売している。2015年は2,000斤購入して（22.5元／斤、4万元、2016年は17元）、販売は3,000斤（30元／斤）と生存率が低くなっている。販売額は9万元である。

上海ガニは、扣蟹800斤を放流して、5,000斤を収穫する。以前は扣蟹600斤で7,000斤の収穫があったが、生存率が非常に低下している。35元／斤であり、17.5万元の収入であった。

魚は稚魚を5月に1,500匹（1.2元／匹）放流し、蟹の販売が終わった冬期の水抜き時に漁獲する。販売は魚1匹が0.5～2斤で、26元／斤で総額2万元であった。

この結果、粗収入は概算で28.5万元であり、経費は16.4万元であるから、当年の剰余は12.1万元となる。

3）決済と農村金融

生産資材（冷凍魚、穀物）の取引先は特定しておらず、電話1本で養殖場まで運搬してくれる。価格は近隣の養殖農家と情報交換して把握している。決済は現金取引である。扣蟹については太湖の稚ガニ養殖農家から現金で直接購入しており、エビの稚魚については浙江省の嘉興（車で1時間）の商人が養殖場に納入する。これも現金払いである。販売についても全て庭先（養殖池）での現金販売である。

年間の運転資金をみると、借地料支払いは先払いで旧暦の正月前であるが、これが3万元、春（エビ2月、カニ2月、魚5月）に購入する稚魚が7万元弱であるから運転資金はおおよそ10万元であり、これは確保されている。親戚や親しい友人などから借金をする場合には無利息であるが、余程のことがない限り借金はしない。

(3) ケース3 2000初年代からの展開－上海ガニ二専業

1）経歴と養殖業の展開

倪林坤は1967年生まれで、村の15組の出身である（註7）。住宅は、廟震公路に面した商店街（自営店舗の2階）にあり、娘（1990年生）は結婚しており、両親、本人夫婦の4人家族である。妻は紡績工場の女工をしていたが、現在は経営主、その兄、父とともに蟹養殖に従事している。

蟹の養殖は、1999年に兄の知り合いと二人で開弦弓より35kmの位置にある平望鎮双廟村に200ムーの土地を借りて開始した。畑を8つの養殖地に転換し、総費用は40万元であった。経営はうまくいかず、投資額を株として譲渡したようであるが、詳細は不明である。2001年に村に戻り、レストランを開店した。

開弦弓でのカニの養殖は2003年に始めた（表4）。太湖沿岸の漁村村の友人2名と14組の亀字圩で23ムー、15組の城角圩で59ムー（2006年に道路用地買収で52ムーに減歩）を借地し（合計82ムー）、扣蟹生産を開始した。23ムーは2006年からは名義貸しになり経営面積は減歩もあり52ムーとなる。2003年は30万元の損失、2004年は10万元、2005年は10万元の黒字で、2006年には負債を償還し、ムー当たり3,000元の剰余を上げている。

2008年からは共同経営を解消して、10・11組の小頭圩の土地55ムーを借地し、2009年には14組（亀字圩）から27ムー、2010年には16・17組（城角圩）から45ムー借地し、以降127ムーの蟹養殖を行うことになる。なお、2002年からは亀字圩で60ムーのエビの養殖を行っており、これは現在も続いている。

この間の借地料の動向をみると、2000年代初めはムー当たり400元の水準であったが、2006年からは600元台、2009年には700元台、2010年からは900元台に上昇している。なお、契約期間は3年であり、2010年の45ムーの新規借地に際しては、ムー当たり1,140元の前借地者への有益費補償を行っている。

剰余は、独立した2008年頃はムー当たり1,500元であった。独立した時期に剰余が減少した理由は、稚蟹（白蟹）の価格が斤当たり40元から20元へと減少したものの、カニの生存率が下落したこ

表4 倪林坤のカニ養殖面積の変化

単位：ムー、元

	①	②	③	④	⑤	⑥	面積 合計	ムー単価						借地料 計
	14組 亀字 圩	15組 城角 圩	10・11組 小頭 圩	14組 亀字 圩	16/17組 城角 圩	エビ 亀字 圩		①	②	③	④	⑤	⑥	
2002						60	60						390	23,400
2003	23	59				60	142	390	390				390	55,380
2004	23	59				60	142	390	390				390	55,380
2005	23	59				60	142	390	390				390	55,380
2006		52				60	112		600				650	70,200
2007		52				60	112		600				650	70,200
2008			55			60	115			750			650	80,250
2009			55	27		60	142			750	750		750	106,500
2010			55	27	45	60	187			750	750	950	750	149,060
2011			55	27	45	60	187			850	750	950	750	154,560
2012			55	27	45	60	187			850	900	950	950	170,610

注) 2013年の聞き取り調査により作成。

とによる。

2011年においては、扣蟹生産が30ムー、成蟹生産が85ムーであり、成蟹生産に比重を移している。独立後は、雇用を行わず、経営主夫婦の他に父（年間2万円の支払い）と兄（同、3万円）を加え、家族労働のみで経営を行っている。ムー当たりの剰余は3,000元であり、総額で38万円となっている。

2013年と2014年は成蟹が85ムー（亀字圩30、小頭圩55）、稚蟹が24ムー（亀字圩19、城角圩5）、合計109ムーとなっている（借地料はムー当たり950元）。成蟹については表5に示したようにムー当たり粗収入、剰余が7,000元、3,000元であり、総額で粗収入が60万元、剰余が25万元である。稚蟹はムー当たり粗収入が7,500元（250斤×30元）、経費率が50%で剰余は3,750元、合計で18万元、9万元である。総計では、粗収入が78万元、剰余が34万元である。雇用は、兄3万円、義父2万円、臨時雇用2万元であり、合計7万元で、差引27万元となる。

2) 飼料購入と信用取引

上海蟹の養殖は加工型畜産と近似的であり、成蟹のコストをみても飼料が1,700元（全体で15万元）、消毒薬が400元（同3.4万元）であり、合わせて2,100元（同17.9万元）となり全体の50%を上回る。このうち、消毒薬（消毒、水質改善、防

表5 成蟹のムー当たり収支（2014年） 単位：元

		価格	構成比	備考
収入	成蟹	4,356	62.2	132斤×33元 （7月収穫）
	えび	1,700	24.3	
	魚	1,000	14.3	
	小計	7,000	100.0	
支出	借地料	950	23.8	40斤×17元 5～6回
	稚蟹	680	17.0	
	消毒薬	400	10.0	
	飼料	1,700	42.5	
	小計	4,000	100.0	
利潤		3,000		

注) 2015年の聞き取り調査による。

疫)については廟港の商人から購入しており、現金払いである。飼料については、飼料店舗（穀物、成蟹の場合は大麦・小麦20%、大豆粕20%、トウモロコシ粒20%、計60%）、魚飼料店舗（冷凍小魚、成蟹の場合30%、稚蟹では10%）、配合飼料代理店（成蟹で10%、稚蟹で90%）が村内に店を構えている（図2）。この取引においては掛売り販売が基本であり、この経営の場合には7月にエビの販売代金で飼料費の3分の1を支払い、残り3分の2は年末支払いとなっている。配合飼料を例にするとトン当たり価格は7,000元であるが、年末払いでは利子が10%ついて7,700元となる。

(借家人)	(店舗種類)		(店舗種類)	(所有者)	(借家人)
安徽省	果物店	廟港商業公司	売店	16組	17組
9組	飼料販売		ファストフード	15組	安徽省
廟港社区	紡績機械部品販売		内装資材販売	光明村	17組
15組	薬局		雑貨屋	12組	—
浙江省	大衆浴場		電気製品修理	19組	光荣村
豊明村	コンビニ	徐虎泉⑮組	建築資材販売	豊明村	—
安徽省	饅頭			豊明村	豊明村
豊明村	カーテン販売		仕立て屋	豊明村	—
豊明村	コンビニ		未利用	15組	—
西草田村	魚飼料製造販売	旧金峰工場	バイク修理	15組	14組
	飯店駐車場		コンビニ	合作銀行	4組
16組	宝くじ売店		住宅	豊明村	—
12組	盛宏飯店		郵便局	郵便局	—
浙江省	スーパー		電気製品修理	16組	—
			コンビニ	10組	—

図2 15組の商店街の構成（2015年現在）

注）15組からの聞き取りによる。

このように運転資金については、商業信用（10%の利息であるが）によって賄われている。また、借地料については廟港の農村商業銀行にある組長の口座に12月末に支払うことになっている。これは総額10万元であり、自己資金である。

養殖池については造成が一巡しているため新規造成はないが、養殖池の保全（畦の補修と底ざらい）を3～5年に1回行う必要があり、これはムー当たり300元である。3年に1回であれば100ムーで1万元、5年に1回であれば6,000元であり、借地料の高さからみると負担は小さい。

(4) 内水面養殖の特徴と金融

以上みてきたように、開弦弓村における内水面漁業は、1984年の請負制の実施とともに副業奨励の一環として開始され、圩の水路や外蕩などでの鮮魚やエビなどの養殖業であった。当初は共同経営形態をとったが、これが解体して個人経営となる（註8）。こうした形態での養殖は1980年代から90年代の主流の形態であり、ケース1、2でみられるが、内水面の面積は小さく、その参入者は限られていた。水面借地料も安く、年間の剰余が1万元にのぼり、早い時点で「万元戸」と呼ばれる経営も現れた。市場経済への早期の対応であった。

これに対し、従来の水田を養殖地へと転化して、主に上海ガニを養殖する経営が1997年から現れ、急速に拡大を見せていく。図1に示したとおりである。ケース1は2001年から29ムーの養殖地経営に転換しており、初期投資は1.9万元（ムー当たり830元）であった。ケース2は1998年に村外で18ムーを、2006年には村外で移転して29ムーの養殖経営を行っている。後者は11.5万元（同4,000元）の投資となっている。養殖地を継承する場合には有益費補償が必要であり、ケース3（蟹127ムー）において2010年の45ムーの借地継承時に5.1万元（同1,100元）が支払われている。初期投資は大きく、資金調達が可能なののみが蟹生産へ参入したのである。

上海ガニの販売価格は、ムー当たりで4,500～6,000元、エビや鮮魚を加えると7,000～9,000元となる。これに対し、借地料は高騰を見せており、2000年代初頭の400元から2015年には1,000元を超えており、経費の20%を占めている。経費はこれに加え扣蟹の購入が20%弱であり、飼料と薬品代が40～50%を占めている。剰余はムー当たり3,000～4,000元となっている。

資金調達をみると、信用合作社からの融資が請負制開始期の副業奨励として見られただけであ

り、投資に関しては自己資金が基本であり、親戚からの無利子貸借がケース2でみられた。運転資金に関しては、経費の30～40%を占める飼料費が販売店からの掛け売りとなっており、その他の魚種の販売期と年末に返済されている。利息はおおよそ10%である。その他は基本的に自己資金であり、余程のことがない限り親戚や知人からの無利子貸借には依存していないと言える。

3. 化繊織物業における企業展開と金融

化繊織物業については、朴ほか[2012b]においていくつかの事例を取り上げているが、ここではその追跡調査によりその後の企業展開と金融について整理しておこう。

(1) ケース4 求是紡績の民間貸借と倒産

1) 工場の概要

求是紡績は2002年設立の化繊織物工場であり、社長は饒貴龍であったが、2013年に倒産した(註9)。饒貴龍は、1964年に開弦弓村7組で生まれる(48歳)。1983年に盛沢中高校卒業後、蘇州絲綢工学院紡績工程科に入学、都市戸籍を取得し、村の奨学生となる。1986年にこの専門大学卒業後、開弦弓紡績に配属になる。就職当時の職務は形式的には新製品開発部であったが、通常業務は一般の修理工であり、不遇であった。そのため、1992年に盛沢工藝製造工場に転職する。ここでは、商品開発部の新商品の研究開発の責任者となり、1995年から97年の3年間で織布の新デザインを次々と考案し、会社の信頼を得る。工場は有梭の織機(K611)が400台余りで職工は合計1,700人、そのうち女工が1,000人という規模であった。1999年に鎮営から請負制への転換があり、工場長ほか3名と3ヵ年契約で工場を請け負うことになった。この時は、織機は無梭の噴水式となっていた。契約終了後の2002年に、村にもどり噴水織機24台で求是紡績を立ち上げる。高学歴のエリートであるにもかかわらず、村営工場では阻害され、より大きな工場で私営化を経験し、私営企業を設立したのである。

求是紡績は初期に日本製(豊田織機)の双噴織機を導入し、その後4回の投資によって、2012年現在76台にまで生産拡大を行っている(註10)。織布の織幅は次第に幅広になっており、3mが主

流になっている。生産量は2006年で1,000万m、販売額は2,700万元であったが、2011年は400万m、1,800万元に低下している。しかし、単価は3.9元から5元に上昇しており、利益も114万元から300万元に上昇している。11の会社からのカーテン、ソファカバーなどの生地契約生産をしており、高級品を戦略としてしていると話した。しかし実態は面料(衣類用)生産を中心としており、市場も面料中心の盛沢市の東方卸売市場がメインであった。この部門は不況下にあり、倒産の引き金となったとみられる。

雇用については、2004年段階で80人、うち40人が村民であり、村外者のうち15人が河南・安徽省からの出稼ぎであった。しかし、嫁入りや地元での就業機会の増加や所得の上昇などにより、2007年からは減少した。2011年では、女工が50人、男子修理工が10人であり、月給は女工の場合、8時間が2,300元、12時間が4,800元、修理工は12時間勤務で5,500元である。出稼ぎ労働者は5名、全て安徽省出身の40歳代であり、夫婦の雇用が1組(工場で住宅を提供)、他は女性で他の工場に勤務する夫との夫婦出稼ぎであった。

2) 民間貸借による資金融通

ここで注目されるのは、上の追加投資において民間貸借を行っていることである。民間貸借(中国語では「民間借貸」)は、一般的にいわれる「地下錢庄」である。2000年代になって私営企業が勃興したが、銀行は担保がないから融資をしてくれない。そこで、企業家は温州モデルにおける資金調達的方式をまね、地元住民からの借入を開始した。村では昔からの伝統である「相互扶助」という下敷きもあった。これが民間貸借である。現在では村民のおよそ30%が「投資」に関わっている(註11)。この民間貸借で資金が集まるかどうかは第一に人柄(信用)、第二が経営であるが、後者については労働者が地元雇用なので経営が悪くなるとすぐに評判になるという。その仕組みは、会社年に利10%(あるいは月利1%)で預金し、引き出しは1ヵ月前に通知し、日割りで利息を清算する仕組みである。平均の預け期間は2～3年である。資金運用者は銀行利息が現在2%台であるため有利である。会社側にとっても銀行融資枠が不動産担保で制約されているため、農業銀

行の金利5.7%, 農村合作銀行の金利6.2%よりは高いが、高利貸の金利よりは格段に低いというメリットがある。貸付リスクは、社長の家も工場も村にあり、会社は動けないという信用によって低いと意識されている。

求是紡績の場合、銀行に工場を担保として融資を受けていたが、貸付期限までに資金調達ができず、期限後に民間貸借で資金調達を行った。資金運用者は村内が50%, 村外(妻の出身の連強村中心)が50%であった。しかし、銀行の信用を失い融資を受けることができなくなったため高利貸しに手を出して2013年に倒産に至っている。この民間貸借は焦げ付いたままであり、鎮内の村と隣接する開発区でも倒産があつて回収できない事案が起きている。

(2) ケース5 江村絲綢の経営展開と金融

1) 工場の概要

江村絲綢は2003年に設立された化繊の織物工場である(註12)。社長の周永林は1962年生まれである。高校中退後、1997年に開弦弓紡績の前身である紅衛紡績工場に整備工として就職。1981年には副工場長に抜擢、1984年から91年まで工場長を務める。しかし、1991年に当時の「連合経営」政策により工場が盛沢工芸製造場に統合され、新しい工場長が派遣されたことから村の経済合作社に移動し、その倒産後、ナイロン衣類の集積地である盛沢鎮の卸売市場で卸商を始めることになる。しかし、経営統合された工場の経営破たんを受けて、今度は周営林が1997年から工場を請け負うことになる。

その時点では、およそ100戸の農家に原料を供給し、手動織機で生産された織布を集荷・販売する形態からの出発であった。2001年に噴水織機30台を導入し(1台10万元)、その後6台を追加して2004年には36台の操業となっている。女工は1人につき10台を管理し、12時間2交代制であり、修理工を含めた従業員数は18人、賃金は月給1,800元であった。機械導入期の販売単価はメートル当たり2元であり、日産量は2,000m、900万元の売り上げで、コストは低かったため15%程度の利益率であった。

2003年には工場を買い取り、江村絲綢を設立している。2005年に織機(1.9m幅)を更新し、70

台、日産21,000mの生産体制となっている。販売価格はm当たり2元であった。

この工場のほかに、2004年から共同経営で開発区に月亮家紡績を設立し、旧式織機84台で3.4m幅の織布生産を行い、売上げ800万元で利益率20%の成果を上げた。この時期の雇用は180人であり、安徽省、湖北省、河南省などの出稼ぎ労働者も雇用した。2008年からは単独経営となっている。

2014年の売上を見ると、製品は10種類ほどであり、光沢のあるカーテン地が多いが、m当り単価は3~10元であり、日産24,000m×320日で768万mで単価7元とするとおよそ5,000万元の売上となる。労賃は600万元であり(4,500~5,000元×100名×12月)、利益は300~500万元となる。ただし、契約生産は行っておらず、過剰化すると価格下落がおり、収入には不安定性がつきまといっている。

2) 投資と銀行融資

近年の投資は、2008年に月亮家紡績を単独経営とした際に、3.4m幅の織機45台(単価6万元)を導入した資金270万元と2009年に江村絲綢の3.4m幅の織機63台(単価6万元)の更新費378万元である。合計650万元は銀行からの融資である。2013年には月亮家紡績を廃止して江村絲綢の敷地を拡張して機械を移動させ、120台体制としている。1台日産200mであるから、合計で日産24,000mとなる。

融資は基本的に不動産抵当である。江村絲綢の土地は村営工場が1996年に信用社の抵当に入っていたものを2003年の工場買取時に70万元で購入したものであり、面積は10ムーである。60年の所有権であり、銀行は不動産評価会社に査定させるが、この土地はムー単価が20万元で総評価額は200万元である。融資限度はその70%なので140万元の融資枠である。実際の売買ではムー単価50万元であり、この計算では500万元の資産となる。

他方、旧月亮家紡績の敷地は開発区にあり、これは廟港鎮(現在は七都鎮に吸収され社区となる)が工業団地として開発したものであり、1区画が10ムーである。2004年に3人の共同所有(経営は2人)で一人120万元、計360万元で購入したものであり、2008年の独立時に2人から240万元

で権利を買収している。この時に初めて登記がなされた（60年の所有権、建物は私有権）。この土地の評価額はムー当り30万元であり、全体で300万元、貸付限度額は210万元となる。売買価格はムー当り60万元であり、実際の資産額は600万元となる。

これを合わせると、20ムーの土地評価額は500万元、貸付枠は350万元であり、実際の資産額は1,100万元になる。農業銀行の場合、年利は5.7%、合作銀行は6.7%である。

(3) ケース 6 田園紡績の経営状況と金融

1) 工場の概要

田園紡績は2006年に設立された化繊の織物工場であり、社長は徐拍明である（註13）。1973年生まれで、出身は西草田村であるが、6組で婿入りする。小卒であり、2年ほど理髪師、さらに水運業（上海と湖州の間）を経験した後、1992年には横扇鎮から織機13台を購入し、蘇北の南通市から出稼ぎ労働者を受け入れて家内工業を始めるが2年で廃業する。1995年からは、セーターのパーツの運送業を行い、1996年からは同時に織機の部品販売店を開店した。同年に、連強村でそこに居住する姉の夫とともに織機18台を導入し、「誠信針織製衣廠」（後に博名針織に改称）を開業する。1998年までは工場経営と部品販売を同時に行っていた。2003年6月からは浙江省濮院の卸売市場でセーターの卸売業を開始する。店舗と倉庫を持ち、妻の伯父の娘、臨時工を入れて計9人で広域的にセーターを集荷し販売した。この卸売業を継続しながら（主に妻が担当）、2006年に金蜂工場跡地を購入し（註14）、博名針織を移転させるとともに（主に長兄と長姉が担当）、2007年からは田園紡績工場を新たに設立する。徐拍明は饒貴龍と異なり学歴もないが、まさに叩き上げで34歳にして近代的工場主の地位にまでのし上がるのである。

田園紡績は、2006年10月に金蜂工場の南側跡地19ムーを購入して、新設された。操業は2007年であり、以降織機を矢継ぎ早に導入し、2011年の織機数は188台であった（註15）。この時点での生産量は、織幅2.1mの織機（56台）が日量270mで年間92万m、織幅3.4mの織機（102台）が日量200mで年間68万m、合計160万mである。販売額は、

前者の単価が2.9円で総額はおよそ1,500万元、後者の単価が4.0円で総額はおよそ2,800万元、20%の外注を合わせて5,000万元となる。利益率は20%と高く、利益は1,000万元となる。雇用は70名であった。

2015年現在の稼働している織機の導入時期と投資額を示したのが、表6である。工場設立当初の機械の更新とともに、2013年からは花機といわれる遮光布織りのアタッチメント（2万元）が導入され、規模は150台で変化はないが、単価の高い製品へと移行している。一般のカーテン生地は繁忙期でm当り3.4～3.5元であるが、遮光布は8.4～9元であり、3倍近い単価である。

また、2014年に紹興市柯橋卸売市場に店舗を設置し、2015年からは社長が営業を行うようになっている。出荷形態は生地のままと染色加工があり、染色加工は種類により7箇所の委託工場で行うが、生地の価格が7.8元/mであるのに対し12元/mと高いが、生地の10%の縮小分と加工賃が加わるため必ずしも優位ではない。現在は生地が60%、染色加工が40%である。労働力は、糸巻後の原料を購入するようになったため、前処理担当の10名が減少して60名となっている。

営業を行う以前は100%卸売市場販売であり、社長が月毎に市場の店舗を回って注文を取っていたが、オーダー率は20～30%で、流行などを勘案したとはいえ殆どが見込生産をしていた。大量取引で楽ではあったが、過剰時の価格下落や投げ売り、資金回収の困難なども経験した。

小売を行うようになり、客の注文が小規模で1回の利益は少ないが、客の数も増え資金の回収が早くなっている（市場の規則により決済は15日、最長1ヶ月）。また、客のオーダーによる注文生産が60%の比重となり、種類別の生産や染色加工

表6 田園紡績の現在の稼働機械の導入状況

	導入台数(台)				年間投資(万元)		
	素機	花機	累計	新規	素機	花機	合計
2011	30		30				
2012	56		56	26	182		182
2013	81	27	108	52	364	54	418
2014	40	110	150	42	294	166	460

注) 2015年の聞き取り調査による。

が安定し、生産の調整は店舗での直接販売で行うことができるようになってきている。これにより、年間を通じた安定販売が可能になっている。

2) 銀行からの融資のシステム

銀行からの融資は、農業銀行と農村合作銀行で異なっている。

農業銀行とは横扇支店と取引しており、これは2006年の博名針織の設立以来の付き合いである。ここでは、年間の融資限度枠は820万元であり、担保は土地と建物であり、その評価額の85%となっている。土地は20ムーであり、1ムー当り評価額は20万元で総額が400万元であり、残りは建物である。建物は2006年に購入した金峰工場の他、3階建てのビル(12,000m²、720万元、未登記、1階は工場で、2・3階は兄が2013年に設立した暁春針織に賃貸)と2013年に新築した2階建ビル(450万元、博名針織が使用)があるが、未登記の建物は担保にならない。この部分が420万元である。農業銀行の融資は主に建物の投資に利用している。他方、農村合作銀行からの融資限度額は600万元であり、これは不動産担保ではなく、保証人をつけている。この融資については生産資金として利用している。

(4) 化繊織物業の展開の特徴と金融

化繊織物業は、1970年代後半に設立された村営企業を起源とするものである。1980年代には郷鎮企業の発展とともに事業を伸長させ、村財政の潤沢化と村民の雇用の確保を実現した。しかし、1990年代になると経営は極度に悪化し、私営化政策の下で、請負時代を経て、ケース5が2003年に設立されるのである。2010年には化繊織布企業は村内に6企業、開発区に7企業、合わせて13企業にまで増加を見せている(註16)。

機械投資の中心は言うまでもなく織機であり、2000年代からは手動織機から噴水織機へ、以降も高性能化が進み、花機なども導入されている。ケース4は76台、1,800万元(2011/12年)、ケース5は120台、5,000万元(2014年)、ケース6は150台、5,000万元(2011年)であった。このうち、ケース4が2013年に倒産して、大きな衝撃となった。

これは、販売方式の問題とキャッシュフローの問題であった。ケース4は、面料(衣類用)生産

が中心であり、盛沢市の東方卸売市場での販売が中心であった。この部門は不況下にあり、倒産の引き金となったとみられる。ケース5は設立から20年近くを経過し中堅企業に成長している。光沢のあるカーテン地を中心におよそ5,000万元の売り上げがあるが、契約生産は行っておらず、過剰化すると価格下落がおこり、収入には不安定性がつきまといっている。ケース6は1973年生まれで最も若い。花機といわれる遮光布織りのアタッチメントを導入し、単価の高い製品へと移行している。また、卸売市場に店舗を設置して営業を行い、注文生産の比重を高め、年間を通じた安定販売を可能としている。ケース5との大きな違いである。

融資については、ケース5の場合は、2カ所の工場敷地(あわせて20ムー)を担保としている。不動産評価会社の査定では、ムー単価が20万元と30万元であり、合計の総額は500万元、融資枠は評価額の70%であるため、350万元である。実勢価格は前者がムー当たり50万元、後者が60万元であり、総土地資産額は1,100万元である。一方、ケース6では、農業銀行からの土地・建物を担保とした工場建設のための融資と農村合作商業銀行からの運転資金融資に分離されている。不動産担保については、工場敷地20ムーの評価額が400万元、3つの工場・ビルのうち登記されている2つの工場の評価額が420万元であり、この85%が貸付限度額となっている。合作銀行からの融資は600万元であり、不動産担保ではなく、保証人貸付である。このように、企業の業績や設備によって銀行の融資に対する査定の基準は大きく異なっているようである。業績が悪化した企業に対しては、ケース4のように融資をストップし、倒産に至らしめることがあるのである。不動産担保の貸付については、農地とは異なり、60年間の所有権が付与され、評価会社もあるため一般的となっているが、実勢価格よりかなり低い評価額となっており、また評価額に対する実行融資枠の設定にも差が見受けられる。都市部と比較すると融資条件は不利となっているのである。このことが、民間貸借などのインフォーマル金融を成り立たせているのである。

おわりに

対象とする開弦弓村は沿海部に位置し、かつては郷鎮企業展開の蘇南モデルの地といわれ、私営企業への転化の後も化繊織物工場を中心に工業化が進展している。一方、第一次産業では、かつての稲作と養蚕が結合した集約的な農業はほぼ消滅し、上海ガニを主とする一部の農家による企業的な内水面漁業にとって代わられている。こうした企業的な展開において農村金融のあり方は重要であるが、研究が乏しい分野であった。そこで、上海ガニをメインとする内水面漁業と郷鎮企業から転換した化繊織物業の展開を6つの個別企業の事例をもとにトレースし、各企業の融資体制を明らかにした。

内水面漁業では自己資金が基本であるが、飼料費の割合が高く、飼料販売店の掛け売り販売への依存が大きく、緊急時には親戚や友人による無利子融資に依存している。化繊織物業においては不動産抵当による銀行融資が一般的であるが、比較的金利の高い民間貸借に依存した場合のリスクは高く、倒産した事例も現れている。

本論では対象としなかったが、「小商い」を行っている自営業層については、需要がどの当りにあるかも含めて把握し得ないが、基本は短期資金の調達にあるとみられ、親戚・知人のネットワーク内で処理されているように思われる。

総じて、農村における融資は繊維などの中小企業においても都市部と比較すると不利な地位にあり、ある程度企業的展開を見せている養殖業についてもフォーマルな金融の対象とはなっておらず、まだまだ農村の金融体制は整っておらず、血縁・地縁関係に依存するところが大きいと言える。

註

- (1) 1990年代までは『中国農村金融統計年鑑』が毎年出版されていたが、農業銀行（民営化、2010年上場、1994年に農業發展銀行が分立）や農村信用社がかなり早い時期から「農民ばなれ」を起こしたことから統計の公表が差し控えられたとみられる。なお、1990年代については朴ほか〔1999〕pp.155-166に一部を分析している。王〔2017ab〕は、主に

『中国農村金融服務報告』によっているが、その内容は限定的である。そのほかに、金融制度（陳ほか〔2009〕、岡崙〔2010〕）、政策金融（王〔2010〕、〔2015〕）、信用社の再編（王〔2014〕〔2017〕）、信用事業を行う合作社（王〔2019〕、若林ほか〔2019〕）に関する事例分析を中心とした研究がある。

- (2) 王〔2017a〕p.117.
- (3) 村の就業構造については、朴ほか〔2008〕を参照のこと。
- (4) 養殖業の展開については、2000年までの動向は、朴ほか〔2010〕を参照。それ以降については、本論で事例的に述べる。
- (5) 2006年9月10日および2016年6月6日の聞き取り調査による。長女（1974年生）は2組の相手と結婚している。長男は勉強が嫌いで小学校も卒業せずに、父の養殖を手伝う。その後、15歳の時に大工（内装工）の見習いを3年間やり、1990年には家具の加工、2001年には蟹の中間商人、2008年からは上海蟹の養殖（12組から19ムー（2008～2015年）、13組から20ムー（～2016））を行っている。これは父とは別の経営であり、父が2015年で引退してからは2016年から父の23ムーを受け、現在43ムーを経営している。父は、亀字圩の東南側の水路（13組20ムー、光明村20ムー）を借地して釣り堀を以前から始めており、4～5年前から客が増えてきている（1日1,100元の入場料）。
- (6) 2016年6月3日の聞き取り調査による。長女（1982年生）は蘇州で保険会社の社員であり、その夫は自分で会社経営をしている。息子4歳はこの家で預かっており、幼稚園に通っている。娘夫婦は週末には帰ってくる。2016年現在、3階建ての家を建築中であり、長女がマネジメントしている（概算で150万元）。
- (7) 2004年8月、2009年9月、2012年1月、2015年9月の聞き取り調査による。1976年、小学校4年のときに学校を辞め、家族で東太湖開発に加わるため移住する。1984年に、母親とともに開弦弓村に戻り、江村食品冷飲工場（村営）に勤務。三年間、1987年まで働いた。その後、江村紡績（村営）から派遣されて（歩合制）、工場幹部の一人（伯父）とともに、盛沢鎮の繊維市場にある工場の店舗に勤務。そこでナイロンの生地の販売を行う（5年間）。1992年に村に戻り、村の織布工場から布を仕入れて販売を行っている。しかし、繊維工場は集団経営から私営へと転換し（1998年頃）、販売のつながりも切れたことから、1999年に蟹の養殖へと転業することにな

- る。
 - (8) 2003年までの内水面漁業の展開については坂下ほか〔2006〕pp.21-22を、それ以降2008年までの動向は朴ほか〔2010〕pp.120-123を参照のこと。
 - (9) 2012年1月に聞き取りを行った。また、朱ほか〔2010〕pp.296-304と周〔2006〕pp.101-107, 168-172を参照した。なお、朴ほか〔2012b〕pp.86-87も参照。倒産のため2015年には調査ができず、叙述に重複が多いことをお断りしておく。
 - (10) 朴ほか〔2012b〕p.87, 表4を参照のこと。
 - (11) 村の農業幹部からの聞き取りによる。
 - (12) 2004年8月と2010年9月, 2015年9月に聞き取りを行った。また、朱ほか〔2010〕p.290-295, 周〔2006〕pp.94-101を参照した。なお、朴ほか〔2012b〕pp.84-86も参照。一部重複がある。
 - (13) 2011年10月に徐拍明から, 2015年9月には会計の呉風林から聞き取りを行った。また、朱ほか〔2010〕pp.281-284, 周〔2006〕pp.162-1166を参照した。なお、朴ほか〔2012b〕pp.86-88も参照。一部重複がある。
 - (14) 金蜂工場については朴ほか〔2006〕を参照のこと。
 - (15) 朴ほか〔2012b〕p.87, 表5を参照のこと。
 - (16) この過程については、朴ほか〔2006〕および朴ほか〔2012a〕を参照のこと。
- 【参考文献】**
- (1) 朴紅・坂下明彦『中国東北における家族経営の再生と農村組織化』御茶の水書房, 1999
 - (2) 周擁平『江村経済七十年』上海大学出版社(中文), 2006
 - (3) 坂下明彦・朴紅・市来正光「中国蘇南地域における農業生産システムの変化と土地問題－江村の追跡調査(1)－」『農経論叢』62集, 2006
 - (4) 朴紅・坂下明彦・市来正光「中国蘇南地域の農村工業化と就業構造－江村の追跡調査(2)－」『農経論叢』62集, 2006
 - (5) 朴紅・市来正光・坂下明彦「中国蘇南地域における農家の就業構造の特質－第13組のモノグラフィー－江村の追跡調査(3)－」『農経論叢』第63集, 2008
 - (6) 陳劍波・池上彰英「農業構造の転換と農村金融改革」池上彰英・寶劍久俊編『中国農村改革と農業産業化』アジア経済研究所, 2009
 - (7) 朴紅・坂下明彦・姚富坤「中国蘇南地域における農地転用と農地調整－江村の追跡調査(4)－」『農経論叢』第65集, 2010
 - (8) 坂下明彦・朴紅・姚富坤「中国蘇南農村の家屋の変化と人口的背景－江村の追跡調査(5)－」『農経論叢』第65集, 2010
 - (9) 朱雲雲・姚富坤『江村変遷－江蘇開弦弓村調査』上海人民出版社(中文), 2010
 - (10) 王雷軒「中国農業銀行の株式上場と不良債権問題」『農中総研 調査と情報』2010.9
 - (11) 岡崎久美子「中国農村金融制度改革の現状と課題：銀行業金融機関の再生と三農政策に呼応した取り組みの中間評価」日本銀行金融研究所『金融研究』2010.4
 - (12) 朴紅・坂下明彦・姚富坤a「蘇南地域における農村工業の転換と雇用吸収力－江村の追跡調査(6)－」『農経論叢』第67集, 2012
 - (13) 朴紅・坂下明彦・姚富坤b「蘇南地域における農村企業の展開と出稼ぎ労働者－江村の追跡調査(7)－」『農経論叢』第67集, 2012
 - (14) 王雷軒「中国の農村信用社連合組織の構造と機能」『農林金融』2014.2
 - (15) 朴紅・坂下明彦「蘇南地域における郷村企業の発展・衰退と農村リーダーの変化－江村の追跡調査(8)－」『農経論叢』69集, 2014
 - (16) 王雷軒「中国農業政策金融機関の変貌と課題」『農林金融』2015.8
 - (17) 開弦弓村誌編纂小組『開弦弓村誌』江蘇人民出版社(中文), 2015
 - (18) 王雷軒a「農村部の資金需要と農村金融の構造」田島俊雄・池上彰英編著『WTO体制下の中国農業・農村問題』東京大学出版会, 2017
 - (19) 王雷軒b「中国の農村信用社の組織再編成と農業融資」『農林金融』2017.4
 - (20) 王雷軒「中国の農民專業合作社による信用事業の現状と課題」『農林金融』2019.4
 - (21) 若林剛志・王雷軒「小規模農家向け融資に見る中国の金融包摂」『農林金融』2019.12